

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2492100017		
法人名	医療法人社団愛敬会		
事業所名	グループホーム若の山荘		
所在地	三重県伊勢市楠部町2605-13		
自己評価作成日	平成26年11月17日	評価結果市町提出日	平成27年1月22日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470800281-00&amp;PrefCd=24&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470800281-00&amp;PrefCd=24&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成26年12月5日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは手作りのケアをモットーとしています。全ての生活の原動力は食であると考えています。食べる楽しさと作る楽しさを実感してもらいたいと考えています。彼岸のおはぎやおせち料理や誕生日に誕生者の好きな食べ物を食べてもらう等しています。また、季節感を感じてもらう為に、季節の食べ物や七夕の飾りつけや正月の門松等実施しています。また、季節を肌で感じてもらう中でも快適な生活環境を提供する為に適時冷暖房を使用し、毎年12月から湯たんぽを使用したり、二名は、入浴日以外に足浴と生姜湿布を実施しています。毎朝バナナとヨーグルトを食べてもらい、健康の基本原則である、快食・快眠・快便を支援して、趣味や楽しみを個人に合わせた支援していく事も重視して取り組んでいます。毎月外出行事を取り入れ見る楽しみを外で食べる楽しみを味わって頂く様にしています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人母体が病院であり、老人保健施設が隣接していることや既に15年の実績があることも、利用者・家族には大きな安心感を与えている。食ることが大切と、日常の食事はもとより、季節を感じさせる料理や誕生日の特別料理など、利用者の期待も大きい。日常の生活そのものがリハビリになるとし、その一つに「手づくり」を多く取り入れており、壁飾りの額も全て手づくりである。職員間はもちろん職員と利用者間のコミュニケーションもよく、なんでも話し合える雰囲気があり、それにペットの猫が加わって、和やかで笑顔の多い事業所である。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	設立当初から「いきいき人生のびのび人生」をモットーとしてその人らしい生活づくりと支援をしている。生活リズムや食の好み等毎月の会議にて具体的取組を話あっている。	毎月2回職員会議があり、その中で理念や年度目標を含め毎月のテーマをどう実践できたかを話し合っているし、「振り返り日誌」で報告している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	隣接する老健の行事や地域のイベントに参加したり、月一回外出行事を実施している。毎年地元の伝統行事「萬歳楽」に参加して餅まきも楽しんでいる。また、民生委員の方から菊を提供してもらっている。	隣接している老健が一つの「地域」であり、夏祭りや介護の日のイベントに見るだけでなく参加している。また地元の伝統的なお祭りには、積極的に参加し、餅まきや甘酒を楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々に集まってもらい定期的に運営推進会議を持ち、若の山荘の活動を知ってもらう様に努めている。この事で認知症は適切な支援があれば普通に生活が出来る事を認識してもらえると考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所活動状況や利用者の状況を定期的に開催する運営推進会議で報告して意見も出してもらっている。具体的な日々の支援を話していく事で、生活リハビリの理解を促している。開催方法や内容については適時意見を集約している。	事業所の活動状況や利用者の現状報告を詳しく報告し、出席者からもたくさんの意見をもらっている。家族の出席が難しいときもあり、今年は年4～5回程度の開催になりそうである。	開催日の決定はメンバーの都合で決めにくい場合も多いが、「事業所を知って頂く」ために、事業所の行事の日に合わせて開催することも可である。ぜひ年6回の開催を目指してほしい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市役所との連携を取るように努めている。また、運営推進会議にて市役所の方に情報提供や運営に関する意見や法改正に関する資料提供をしてもらっている。	更新手続きや日常の出来事の他に、今年度はお風呂の改装があり、改装費用の補助がらみで市役所には頻繁に出掛けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	心身共に身体拘束しない目指す取組みを日々取り組んでいる。また、確認の意味でも社内研修という形で確認している。玄関は日中施錠せず、玄関に出て花を見たり自由に外の空気を吸う等安全確認をしながら支援している。	玄関まで出て行く利用者もいるが、見守りで対処している。日頃から日総研のDVDを利用し、職員全員で勉強をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日々の生活支援を一人一人の生活リズムに合わせて支援して、毎月の会議にてケアプランの話し合いで、個別支援メニューを検討して実践している。確認の意味で社内研修という形で虐待防止の研修を実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症を抱える入居者の権利を擁護する為に成年後見制度を利用し本人様の財産と生命を守る取組を一名している。また、確認の意味で毎月の会議にて生活全体を振り返り、社内研修を実施している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、質問を受けながら時間をかけて利用料金や重度化等について説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を玄関に設置したり、毎月の家族様への手紙を送付する際にアンケート用紙を同封したり居室担当が家屋様としっかりコミュニケーションを取る事で意見を出してもらいやすい環境整備に努め、出た意見には可能な範囲で対応している。	利用者とは普段の会話の中で意見を吸い上げており、うなぎを食べに行ったりしている。また家族とは、居室担当が毎月家族宛に利用者の近況報告と一緒にアンケートを取っており、小遣いの使用報告をもっと頻繁にするよう意見をもらっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常の生活支援の中で互いに意見を出し合いアイデアを出しながら業務に取り組んでいる。毎月二回の会議では入居者の生活状況を全職員で振り返り話し合いケアプランに落とし込んでいく。	月2回の会議の他に毎月のクオリティチェックや振り返り日誌もあり、職員の意見を吸い上げる機会が多い。お風呂に関することや猫のえさ、ゴキブリなど身近な意見もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は各々の職員の特性に着目して役割分担をして日常業務の調整をしている。会議にて意見を出してもらい、入居者にとってどうかという視点で事の大小関係なく日々改善している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内社外研修は適時機会があれば参加してもらおうが、一番身近にいる若の山荘の入居者にしっかりと関心を持って接していくのが各々の職員が育つ最善の取り組みになると考え実践している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス協議会定例会や同業者の開催する研修会に必要なに応じ、適時参加を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期面談で生活状況を把握する様に努め、入荘の際に本人様の意向や家族様の意向を確認してケアプランに取り入れる様に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの生活状況を可能な限りゆっくり聴く様に努めている。また、家族様の協力が得られれば、センター方式による情報収集を、家族様に記入してもらい、どの様に生活を送ってもらうかを検討する様に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人様や家族様の思いを確認し両者にとって改善方向になる支援を提案・調整していく様努めている。また、あらゆる形で本人様・家族様と相談及び意見収集を実施する様に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側支援される側という意識を持たず互いが協働しながらありのままの姿を互いが受け入れて生活出来る様に努めている。お茶やお花の作法を職員が教えてもらったりもしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者様の生活状況を毎月、居室担当者が家族様に手紙でお知らせしている。適時必要な事や変化があった時には電話でも連絡している。面会等家族様と入居者様が一緒に過ごすが出来様促している。信頼関係の構築にも努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者の趣味仲間の来荘や知人からの手紙や家族様と過ごす時間の確保(面会や行事)に着目して支援している。	入居時にセンター方式の用紙になじみの関係を記入していただいているので、職員は利用者各人の馴染みの関係を把握し支援している。お花や絵手紙の趣味仲間の訪問がある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎月のお茶会や生け花や外出行事で利用者同士と一緒に楽しめる様に、職員が適切な介入をする事で楽しい時間を持ってもらえる様に努めている。毎日の食事やお菓子の時間は職員も一緒に過ごしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームを退荘し、永眠された入居者のグリーングケアや病気で入院した方の見舞いを全職員で入れ替わり実施している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で声をかけ、各々の思いの把握に努めている。言葉・表情・しぐさ・態度等からそれとなく確認している。センター方式の活用やインテーク面接での情報収集にも努めている。	日々の会話の中でポロツと出る言葉を吸い上げ、職員会議に出し、共有している。「足が痛い」という言葉から、シルバーカーなら上手に歩けると、つながった例もある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式の活用やインテーク面談での情報収集はもちろん、生活の中で本人自身の言葉や家族様・友人等の訪問時も入居者様の生活・人生を知る貴重な機会と考え把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心身共に各々の出来る事・出来ない事・したい事・したくない事をしっかりと観察し、その人がどの様に生活するのが良いのか意見を出し合い試みている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人様や家族様には、日頃の関わりの中で思いや意見を聴き、職員全員で会議の場で生活状況全体を振り返る事で現状に即したケアプランになる様に努めている。	居室担当職員が利用者・家族の意見をまとめ、毎月のカンファレンス会議で全職員で検討し介護計画につなげている。医師・看護師の意見は「医療指示書」でもらっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のファイルを用意し心身の状態や生活状況を本人の言葉を交えながら記録している。いつでも全職員が確認出来る様になっており勤務時間開始前には申し送りをし、情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人様や家族様の状況に応じて必要な支援は柔軟に対応する様に努めている。かかりつけ医のリハビリや整体マッサージ等が挙げられる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が安心して地域の中で生活出来る様に、警察との連携や隣接する老健山咲苑とも連携して、入居者が事故しない様に安全の確保に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	山崎外科内科が全入居者のかかりつけ医になっている(本人様・家族様納得の上)。また、専門診療科が有れば、山崎病院と連携とり希望に応じている。基本的には家族様が同伴する事になっている。	入居時に話し合いの上、全利用者が協力医である山崎外科内科をかかりつけ医としている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、利用者の健康管理や状態変化に応じた支援を行える様に努めている。看護職が不在の時はかかりつけ病院(かかりつけ医)と連携取っている。看護職員と介護職員の協働にも努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には本人への支援方法や基本情報を医療機関に伝え、交代で職員が見舞いを行っている。また、家族様・成年後見人様・かかりつけ医とも連携情報交換しながら退院支援にも結び付けられる様に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に伴う意思確認書を作成して事業所が対応しうるケアの限界がある旨説明して家族様の意向を確認している。本人様の気持ちを大切にしつつ、家族様と適時話し合いをしつつ、安心して生活を送れる様に努めている。	以前看取りを行った実績はあるが、現在は食事の摂取が難しくなれば、隣接の老健に移ることになっている。家族は同じ法人が看ってくれるならOKとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急手当や蘇生術の研修を毎年ではないが定期的実施していく。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	まず、火災を起こさない様に気をつけ、消火器の設置場所の把握も全職員把握している。毎月実際に一回避難訓練を実施して、あらゆる状況に対応できるように卓上訓練も毎月実施している。災害食も試している。	毎月2回(実際の訓練と卓上訓練)、いろんな状態を想定し訓練を行っている。備蓄も約3日分あり、それを試食する日もある。現在、市の「福祉避難所」としての検討が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の体調や気分を配慮して適切なトイレ誘導に努めている。基本的に否定せず本人が傷つかないことがけに努めているが、各々性格も違うので臨機応変に対応している。トイレのプライバシーカーテンは閉める様気を付けている。	トイレ誘導時の声かけと、トイレのプライバシーカーテンの閉めるタイミングを職員に注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人一人の入居者に合った声掛けをし、複数の選択肢の中から選んでもらったり様々な場面で本人の希望を聴く様にしている。(入浴・食事・散歩・起床時間・就寝時間等)		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の体調に配慮しながら、その日その時の気持ちを察して、何を心配して、何を希望しているのかを考えてマニュアルにない個別性のある支援を実施出来る様に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で服を選んでもらえる人には、朝の着替えは自ら服を選んでもらい、自ら決めにくい人は本人と相談してセットする様に努めている。また、一部の入居者であるが、馴染みの理容店に通っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備から盛り付けや後片付けまで職員と一緒に役割分担して生活している。誕生日には誕生日者が希望した献立を職員に伝え豪華な食事を家族様と一緒に楽しんでもらっている。	全ての生活の原動力は「食」にある、と食に重点をおき、一般家庭のように職員が利用者の声を聞いて食事を作っている。おかずにも重点を置き、味付けにこだわり、量は少なくとも品数でカバーし、ゆっくり会話を楽しみながら、食している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個別に普段の食事量を把握して体重も確認しながら食事提供している。食事形態の工夫にも配慮している。朝は、野菜や卵中心・昼は肉料理・夜は魚料理にして栄養のバランスにも配慮している。尿便の状態を踏まえて排尿表の活用もする。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアの声掛け誘導をしている。自力にて困難な方は、職員が義歯を外してケアしている。夕食後は必ず義歯を入歯洗浄剤につけている。定期的に歯科医の往診指導を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を活用して排泄パターンの把握に努めている。定時及び随時のトイレ誘導が出来る方は可能な限り布パンツ及びパット対応している。逆に排尿障害がある方は内服及びパットの使用は本人様や家族様の気持ちを考えて使用していく。	約半数の方が完全自立で、オムツ使用の方はいない。定時・随時のトイレ誘導に力を入れており、落ち着かない動作や素振りを見逃さず、細心の注意を払っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い食材(野菜等)やヨーグルトやバナナを献立に入れると同時に、散歩・家事活動で体を動かす様にして、なるべく自然排便が出来る様に取り組んでいる。適時腹部マッサージも実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週四回入浴をして昼夜風呂してもらっている。無理強いしないが人を変えたり言葉やタイミングを変える事で気持ち良く入浴してくれている。入浴拒否や熱等の時は清拭し着衣も変えて清潔に過ごしてもらえる様配慮している。	大浴槽から2つの個浴槽に改装され、週4回の入浴が可能となった。昼(9~14時)夜(15~20時)の入浴が可能である。ゆず、菖蒲をはじめ入浴剤も使用し、楽しむ工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	適時状況を見て冷暖房を使用したり、湯たんぽを就寝時使用して寝間着も湯たんぽに巻いておき暖かい状態で着てもらう。入浴日以外に二名のみだが就寝前に生姜湿布と足浴を実施している。寝付けない方には一緒にいて話を聴く等している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の確認表を張出し現状を確認すると共に処方箋をファイルに綴じて全員見れる様にしている。また定期的には内服薬の確認を職員会議にて確認している。内服の確認にも努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎月お茶会では、お抹茶をこして頂き、生け花では経験があり自力で生けれる方は見守りのみで楽しんでもらっている。ふと出た言葉から食べたい物を献立に入れる様に努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員や家族が同行して外食や墓参りや美容室等に行っている。また、天気の良い時には外の散歩に出かける。外出行事で買い物ツアーや納涼祭りにも出かけている。毎年、地元の祭り(萬歳楽)にも参加している。	天気の良い日は併設の老健の方へ散歩に出掛けるし、毎月定期的に食事や花見、買い物ツアー、お祭りや外出行事を計画している。事業所が伊勢神宮、本宮の近くであり、毎年恒例の大学駅伝の応援や天皇陛下が参拝に来られる時は、みんなで出掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にお金を持ってもらっている人はいないが、外出行事で、支払いをする時に、支払いをしてもらう事が稀に見られる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	以前は事務所の電話を使い電話する事があったが、現在は家族様の了解をとって携帯電話を自ら持ち自由に電話してもらっている。手紙を書く人はいないが、希望があればいつでも支援していく。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者によって感じ方は違うが、茶碗を洗う音や御飯や煮魚が煮える音や香りが家庭的な雰囲気になる様にしている。また、毎月玄関に季節の花を飾り、毎月壁画も変えて楽しんでもらっている。	玄関の入り口に、見事に咲いた大輪の菊が飾られている。広い食堂兼居間にはテーブル、ソファ、ペットの猫のベビーカーや寝床が置いてある。壁には利用者手づくりの大きな季節の絵や行事の写真が、手づくりの額の中に飾られている。床はクッションフロアになっており、歩き心地が柔らかである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関にベンチが有り季節の花に囲まれて日向ぼっこしている入居者もいる。外の空気を吸い穏やかな表情で鼻歌も歌って過ごす様子が見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	写真屋使い慣れたものや家族様が気に入るような物を用意してくれている。また、生活道具の整理も家族様と居室担当者が相談して実施している。	各居室ともベットの他に押入れ、トイレ、洗面台がある。家族の協力を得て、テーブル、椅子、テレビの他、お花を飾ったり、壁には写真、絵、絵手紙などが各部屋とも個性的に飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	シンクや手すりは利用者に合わせて作られている。床は転倒しても衝撃が少ないクッションフロアになっている。しかし、全てのバリアを排除してしまうと体を動かす可動域が極端に小さくなってしまふ為、ある程度バリアは残している。		